

中部地区 公民館だより

第144号

令和5年2月1日発行
上山市中部地区公民館
上山市十日町4番11号
TEL 673-2588
FAX 673-0379

ミツバチが作った蜜蝋で 肌に優しいハンドクリームが完成！



ハチを知れば怖くない
です。仲良くなれます。

1月22日(日)、ハチ蜜の森キャンドル代表の安藤竜二さん(朝日町在住)にご指導いただき、蜜蝋ハンドクリームを作りました。

はじめにハチに関するさまざまなお話をいただき、豊富な知識に唯々感心するばかりでした。自称“ハチオタク”の先生からは「ハチのことをもっと知ってください。ハチは神ですよ」の言葉が何度もでてきました。種類によっては畑の青虫やクモを食べてくれるハチもいるし、人を襲う黄色スズメバチを食べてくれる大スズメバチもいること、ハチが人を刺すのは時期があることなど興味深い内容の話をお聴きしました。オオスズメバチの標本を間近で見せていただきましたが、「死んでいても怖いよね」の声が多く、ハチと仲良くするには、まだまだ知識不足を感じました。



講師の安藤竜二さん

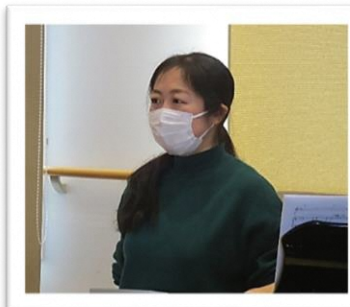


講話の後の実技では、蜜蝋ハンドクリームを作りました。蜜蝋は1群あたり1年間にわずか500g程しか収穫できない貴重なもので、なおかつ丁寧に精製し、安全で安心して使えるものを準備していただきました。蜜蝋とオリーブオイルの分量を量り湯煎する作業では、少しずつ蜜蝋が溶ける様子に「面白いね。わくわくするね」と大人も童心に返りました。専用容器に流し込み、好きなエッセンスオイルで香り付けして完成です。「へらに付いたクリームも勿体ないから手さ付けるべ」「すごくしっとりして10歳若返りそうだ」と冗談もでるなど笑顔がいっぱいの楽しい講座となりました。



はこべの会

歌の教室



講師の鈴木友恵さん

1月13日(金)、音楽教室と一ん・まあれの鈴木友恵氏を講師に迎え、はこべの会 歌の教室を開催しました。

今年度は「冬の定番曲」と「乗り物の歌」10曲で楽しみました。

曲に合わせて手遊びをし

り、マスク着用の上ですが歌をうたったり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

最後に講師の鈴木友恵さんから歌のプレゼントをいただき、素敵な歌声に聞きいってしまいました。



出前スポーツ教室

シャフルボード



講師の齋藤武司さん

カローリング



12月23日(金)シャフルボード、1月23日(金)カローリングを出前スポーツ教室で行いました。

はじめに簡単なルールの説明をしてもらい、早速競技開始です。両競技とも1ゲームは和気あいあいと進んでいましたが、試合数がかさなるにつれ「右」、「弱く」など、声が聞こえてくるようになりました。そして一瞬、静寂がおとずれ、緊張した時間がながれ、ジェットローラーやディスクが動きだすと、またいつものような、にぎやかな笑い声が聞こえてくるようになりました。「頭ではわかっている、思い通りの所にはいかない。」「わかってるけどできない。」と言いながらも楽しい時間を過ごしました。



さて、これはどうやって攻略しましょうか？



令和4年度通信大会 俳句の部 入選作品

選者 上山俳句協会会長 佐藤権一郎氏

《特選》

藪枯らし元は名士の捨て屋敷

選評

かつては名家の大きな家屋敷であったが、今は雑草がはびこっている。季語の「藪枯らし」がこの放置された屋敷の様子を全て語っている。

石黒正二(北町)

《秀逸》

菊二輪古き医院の引戸前

選評

菊を大切に育て、患者にも優しい街の医院がある。何気ない風景であるが、医院に対する作者の眼差しが菊を通してうかがえる句である。

玉宮武彦(十日町)

妻の留守五臓沁み入る温め酒

選評

旧暦の重陽の日から酒を温めて飲むと言われている。一人でゆっくり飲むのもいいがやはり少し寂しい。妻の早い帰りを待つ句である。

会田洋勝(元城内)

《佳作》

新米のくびれの深き俵かな

佐藤ミヨス(十日町)

枝豆の押し出す指の塩の味

山口修一(北町)

柿すだれ白き蔵王を中に据え

鈴木省三(美咲町)

太極拳

出前スポーツ教室

バランス強化と転倒防止にも
効果があります

日	時	2月8日(水)
		午前10時から
場	所	多目的ホール
講	師	NPO 法人
		かみのやまスポーツクラブ
対	象	中部地区在住の方
参	加	無料
持	物	マスク着用
		必要な方は飲み物
		屋内シューズ

参加者募集

健康ポイント対象事業 20P

2月の百歳体操はお休みです

はこべの会 サロン

日	時	2月20日(月)
		10時30分から
会	費	無料
申	込	締切 2月16日(木)

童謡愛好会”野の花”さん
とのコラボです。
一緒に合唱を楽しみます。



2月の予定

2日(木)	研修会の為 午前中、職員不在
8日(水)	出前スポーツ教室(太極拳)
13日(月)	消防訓練(職員のみ) 事業検討会 役員会
14日(火)	はこべの会閉級式
20日(月)	はこべの会サロン

藤井松平氏シリーズ 1.「藤井松平信通侯」(2)入封のころ

天領地だった上山領へ、元禄10年(1697)9月15日付けで備中国庭瀬領主藤井松平氏信通侯に移封命が発せられました。

この藤井松平氏の説明は多岐にわたります。遠祖松平長親・信忠の直系に徳川家康があり、長親から別れた信忠の弟利長が藤井松平の流れになりました。三河国碧海郡藤井(現在の愛知県安城市藤井町)に住した長親の五男利長を祖とし、藤井松平七代が信通です。松平(徳川)家の元祖は清和天皇を源流とし、得川姓も名乗ったようです。関ヶ原の戦いで勝利し江戸幕府を開いた徳川家康の一族にあたり、徳川姓は家康家のみとし、一族諸家は松平姓に留めました。「十八松平(十八公)」と称される諸家は家臣格「譜代」として全国に序しました。

藤井松平家五代信之(老中、大和郡山藩九万石)の長男六代忠之は下総国古河藩主(八万石余)でしたが、父信之は死の前に二男信通に一万石を分与し大和興留(奈良生駒郡)に封じさせました。兄の忠之は陽明学者熊沢蕃山を父の代から預かっていましたが、藩の治水干拓事業で治績を上げたにもかかわらず蕃山の幕府批判はやまず、藩主忠之は狂疾乱心し死去しました。藤井松平家は信通が領地を分与されていたため改易にならず、信通は藤井松平家の七代として家督を継ぎ備中国庭瀬藩(岡山市庭瀬、三万石、陣屋藩庁)に転封、次いで上山藩主となったのです。

しかし、前号で紹介した様に元禄10年(1697)桜田門勤番、同12年(1699)日光祭礼奉行役につくなど多忙だったようですが、「元禄10年11月9日松平信通侯は下臣杉原加兵衛、小池模七郎二人を先発させ、(上山天領地)代官諸屋内蔵助、室七郎左衛門より領収せしむ」(『上山年代略記』②)とあり、元禄11年5月11日項に続いて「家臣中山四郎右衛門は月岡城跡形もなく毀されしを見て、斧の音砕く言の葉なかりせば 月岡山の花をや見しを」(同)とあり、領主・家臣みなが城持ちを切に懂れていた心情が感じられます。

領国入部は元禄12年です。「元禄十二年

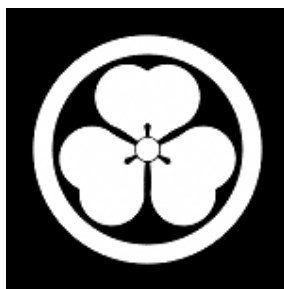
(1699、7月10日)己卯年当地八幡祭礼に付き殿様御入部の御祝儀として町中在々共に踊りを仕組み、うら町法円寺南隣屋敷にて仙台より泉太夫あやつり狂言、新町たたみ屋半内屋敷にてはひわん太夫かるわざ芝居仕る」と町の様子とともに記録されています(『上山三家見聞日記』①⑦)。

信通侯の上山への転封理由を市史は「備中庭瀬は無城なるゆえに信通侯深くこれを嘆かれ、

(側用人)柳沢侯の側近細江広沢に頼み、柳沢侯の尽力にて城地を再興せしと云々」と、藤井松平氏が丹波篠山藩主だった頃からの家臣で代々随伴役を勤めた森本家十一代秀晋の言葉を紹介しています。

名家である藤井松平家は、宛がわれた上山領のことを調査し先手を打つ慧眼をもっていました。前領主代の領内火災や「耕合」紛争など密かに内偵していたのでしょうか。大名は転封に際して領内に治政方針を示しますが、信通侯の場合は入部に先立ち「元禄十年の榜令」

(1697)をだし、公儀法度、城下治安、宿場機能の指針を発しています。高札内容は、①公儀御法度〔幕府御法度〕を堅く守ること、②御伝馬人足は昼夜滞ることないようにすること、③怪しき者を隠さないこと、④博奕は禁止、⑤新しい商売は禁止(経済統制)、⑥町中諸役は勤勉に励め(普請人足、道路掃除、火災には駆けつけよ)、⑦家中侍、中間・小者、町人百姓は身分を弁えて生活せよ。法令、習慣法により制度、治安維持を図る姿勢が見とれます。



藤井松平信通侯の「家紋」

参考文献:「上山市史」、「藤井御傳記」①、「上山年代略記」②、「上山三家見聞日記」①⑦、「森本家文書集」②⑧など。年代については資料毎に多少の異同があるようです。